もも・ネクタリン情報　No.5

令和7年　5月16日発行

JAグリーン長野営農販売部・経済部

長野県No.1のもも･ネクタリン産地を守ろう！

◆生育状況と当面する作業について

本年の結実は平年並みとなっている。生育は、5月上旬の気温が低めに推移したため、昨年より遅れてきた。初期肥大を促すため、摘果等が遅れないよう進める。

また、せん孔細菌病は、現状発生は少ないが、安心せず、枝病斑の除去は徹底する。

1. 5月末頃より、硬核期となっていく。生理的に不安定な時期にとなるため、核障害の低減のため、急激な摘果・新梢管理にならぬよう十分注意する。
2. タンポポ等はミカンキイロアザミウマの発生源になるので除草を徹底する。
3. 配布されている「葉面散布肥料・特殊資材の使い方」を参考に葉面散布肥料を有効に活用する。着果量が多く、摘果に時間がかかる場合は、樹が衰弱しやすいので特に活用を考慮する。

【もも薬剤防除】

◆第６回薬剤散布について

1. 散布時期:5月24日(土)～5月28日(水)　　《実際散布日記入　　月　　日》
2. 調 合 量:水100ℓ当り　※混用順に記載。

農薬名	使用量	対象病害虫	収穫前
固着性展着剤アビオンＥ	６６mℓ	―	―
トレノックスフロアブル	２００mℓ	黒星病	７日前
ＩＣジンク水和剤	１００ｇ	せん孔細菌病	発芽前~発芽初期
㊞ダイアジノン水和剤	１００ｇ	ｱﾌﾞﾗﾑｼ類・ﾓﾓﾊﾓｸﾞﾘｶﾞ・ｶｲｶﾞﾗﾑｼ類・ｹﾑｼ類	前日

【ネクタリン薬剤防除】　※もも・ネクタリン混植園

◆第６回薬剤散布について

1. 散布時期:5月24日(土)～5月28日(水)　　《実際散布日記入　　月　　日》
2. 調 合 量:水100ℓ当り　※混用順に記載。

農薬名	使用量	対象病害虫	収穫前
固着性展着剤アビオンＥ	６６mℓ	―	―
トレノックスフロアブル	２００mℓ	黒星病	30 日前
ＩＣジンク水和剤	１００ｇ	せん孔細菌病	発芽前~発芽初期
㊞ダイアジノン水和剤	１００ｇ	ｱﾌﾞﾗﾑｼ類・ﾓﾓﾊﾓｸﾞﾘｶﾞ・ｶｲｶﾞﾗﾑｼ類・ｹﾑｼ類	21 日前

3. 散布上の留意事項

①**極早生品種**（アームキング等）は収穫開始日にかかる可能性があるため、マイコシールド、トレノックスフロアブルを散布する場合は、**散布を早めに終了させる。**

【第６回薬剤散布もも・ネクタリン薬剤防除共通】

1. 散 布 量:10a当り⇒500ℓ以上
2. 散布上の留意事項

①IC ジンク水和剤は、高温時に葉の薬害が発生する場合があるため、注意する。

②うどんこ病の発生が心配される場合は、コロナフロアブル 400 倍(水 100ℓ当り 250 mℓ)又は、イオウフロアブル 500 倍(水 100ℓ当り 200 mℓ)を加用散布する。

③固着性展着剤アビオンEに代えて、K. Kステッカー3,000 倍(水 100ℓ当り 33 mℓ)を使用してもよい。ただし、最後に混用する。

④ダイアジノン水和剤に代えて、㊞オリオン水和剤 1,000 倍(水 100ℓ当り 100g)を使用してもよい。

⑤せん孔細菌病対策として、第6回・7回の中間で、展着剤ササラ 3,000 倍(水 100ℓ当りに 33mℓ) +クプロシールド 1,000 倍(水 100ℓ当りに 100g)+クレフノン 100 倍(水 100ℓ当りに 1,000g)を特別散布してもよい。ただし、白く汚れやすいので周囲への飛散に注意する。

◆せん孔細菌病の春型枝病斑・灰星病を除去しよう！ ！

落花期より春型枝病斑の発生が散見されている。園地により、状況が異なるが、果実被害に至ると、商品化率に大きな影響を及ぼし、収量に影響するため、甚大な被害にならぬよう、対策を徹底する。

1．春型枝病斑と葉への感染症状の特徴

①春型枝病斑は開花期頃から現れ、芽基部がやや陥没し、薄い黒褐色を呈する。5月中下旬頃には黒色の典型的な病斑となる。枝病斑は芽基部に発生し、陥没してひび割れる。ヤニを噴出することもある。

※枝先端に花腐れ・枝枯れしているものは、灰星病の可能性も高いが、せん孔細菌病である事もある。
いずれの場合でも、剪除は必要。

②葉では、はじめに葉脈で区切られた不整形の斑点ができ、淡褐色～紫褐色の斑点となり、やがて病斑部分が乾いて抜け落ち、不整形の穴になる。

③果実での発病は、幼果ほど感染しやすく、ピンポン玉より大きくなると感染しにくくなる。

◆ももうどんこ病並びにりんごうどんこ病（毛じ障害）について

	もも うどんこ病	りんご うどんこ病(毛じ障害)
発生時期	落花30日頃から (本年は5月末旬頃)	落花15日頃から(満開後20日後～25日頃) (本年は5月上中旬頃)
初期症状	白粉をまぶしたような円形の病斑 毛じ内に白粉が観察される 果皮に異常は見られない	淡褐色～褐色の小斑点 毛じは健全 果皮が淡褐色～褐色に変化
後期症状	菌そうは消え、毛じや果皮が褐変 着色期に目立たなくなる 一部でやや凹んだサビ状になる	被害部はサビ状となる 軽微なものは着色に より目立たなくなる

★発生した場合の対策

①果皮が既に大きく変色したものや、サビ状になっているものは摘果する。

②被害果が多い場合は、中でも程度の軽い果実や果柄部側(ホゾ側)のものを優先に残し、空枝にはせず、適正着果量を確保する。

◆かん水の実施について

この時期は、平年並みの降水量でも、不足する時期となるため、積極的にかん水を実施する。干天が続いたら10日程度に20㎜程度、又は7日程度に15㎜程度のかん水を行なう。

※10aに１㎜のかん水をするには、水1,000ℓが必要です。樹冠下に集中して行う。

※目安として、かん水ポンプ口径インチ半を利用し、10a当り2時間程度。

◆仕上摘果について

摘果は早く行なうほど果実肥大の効果は高いが、時として生理落果や核割れ果を生じるので摘蕾・摘花を含めた予備摘果と本摘果、さらに生理落果が終わり袋掛け時に見直し摘果をする3段構えの着果管理が品質の良いものを揃えるために大切。

1．　本摘果

①時期・・・果形の良否がはっきり判別できる満開40～50日頃（5/末～6/上旬頃）に行う。

※満開後50日以降から硬核期となるため、核割れの多い品種ほど、摘果は避けたい。

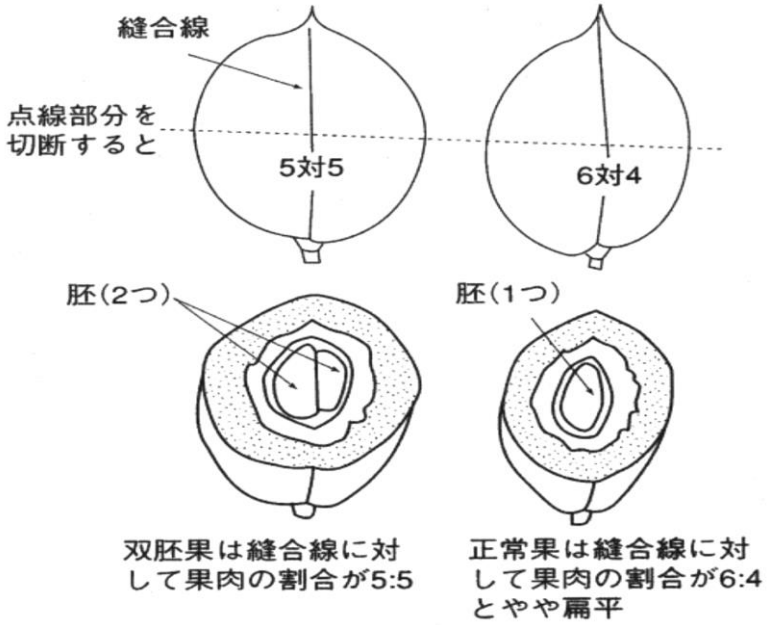
②程度（結果枝別の摘果基準）

・長果枝で2個
・中果枝で1個
・短果枝5本で1個

大きい果実を残し、ガク片が残った発育不良果・変形果・病害虫被害果及び着果位置の悪いものを落とす。

③残す果実

・長手（ラグビーボール型）で大きく、正常な色沢の物を残す。
・左右均等に肥大した丸い果実は、双胚果であるので落とす。



2. 灰色かび病対策

果柄部に、がく片や幼果が入り込むと、灰色かび病の基となる。結実よく、摘果が遅れると特に目立つため除去を徹底する。

◆新梢管理について

1．芽かき

①徒長枝は無駄なエネルギーを使い、樹形も乱し良品生産のさまたげとなる。

②主枝・亜主枝の背面や大枝の切り口、さらに長・中果枝の基部10㎝の直上芽は強勢な徒長枝となりやすいので、摘果に合わせてかき取り処分する。

2．摘心

①枝の背面から出る芽（新梢）は全部をかき取るのでなく、必要に応じ捻枝や摘心処理して日焼け防止と結果枝確保に利用することが大切である。

②摘心は5月下旬と6月下旬の時期に5～7葉で切っておくとよい。